古代日本語の成立過程

——彌生式文化を土台とする社会変革との連関において——

福田良輔

まへがき

日本語系統の問題は、今日まで多年の努力が続けられたにも関らず、他言語との間に未だ言語の親族関係を決定するに足る十分な証拠が挙ってゐない。しかしながら、言語の系統研究上の方法論やその実践技術の上に、最近著しく新しい分野が開拓されつつあるので、系統論及び祖語の解決に大きな期待を寄せることができる。

それはそれとして、原始日本語（古代日本語の主流となった言語といふ意味において）が、日本列島内に人類が棲息して以来の最初からの居住者の言語であるにせよ、または後来者の言語であるにせよ、列島内において言語の外的諸要因に拘束されて西暦八世紀を中心とする古代日本語が成立するに至った、その成立過程を考察することは、日本語系統論の問題よりも、更にむしろ国語史・方言史及び方言区域形成の諸問題に対し、新な観点に立つ重要な問題であらう。

古代日本語の成立過程を明らかにすることは、極めて困難であって、何ら具体的成果が期待されるわけのものではなく、仮説に基づく蓋然性の範囲を出ない。しかし、一つの仮説に到達する過程において提出されるであらう諸問題は、国

語史・方言史等の問題や列島内における方言区域の成立論に、重要な意味を有つと思はれる。したがって、筆者は、本稿において必ずしも古代日本語成立過程を考察し、具体的に明らかにすることを目的とするものではなく、むしろ考察の過程において、成立要因として考慮される諸問題を提出し、それらが、古代日本語成立問題のみならず、国語史・方言史及び方言区域成立の考察上、重要な意味を有つことを提案するに止どめたい。

一

日本語系統論に関係ある問題として、日本語は日本列島の最初からの居住種族の言語であるか、それとも先住種族の言語がある列島に、後に渡来した種族の言語であるかは、従来より問題になってゐるところである。両説のいづれが正しいにせよ、列島内において、原始日本語が他言語を同化したことは事実であるから、この問題は系統論には直接の関係はない。しかして、一言語が他言語を同化するには、同化した言語の種族が同化された言語の種族に比して、文化・経済・政治・人口等の総合力において優れてゐることである。とすると、日本語が最初よりの居住種族の言語である場合は、後に渡来して来たいくつかの種族よりも、その総合力において優ってゐたことが考へられる。縄文文化時代においては、恐らく種族の人口数において絶対的に優れてゐたであらう。しかして、この場合、列島内の社会状態により、同化の過程に差異を生ずる。日本列島が縄文文化時代を有することは確実であるから、少くとも列島内の諸所には、地縁又は血縁共同体としての小文化圏乃至生活共同体が、日本語を母語とする種族によって形成されてゐたと思はれる。これら小文化圏の日本語がすでに方言的差異を生じてゐたと仮定することは可能である。しかして、列島内には縄文文化時代に人種的に異なった種族がすでに存在してゐたと見る事も可能であるから、[1] 日本語とは言語を異にした種族が母語を捨てて日本語に同化したとすれば、母語の影響をうけた変種の日本語が、すでに縄文文化時代の日本列島内の諸所に形成されたであらう。し

かしながら、縄文文化時代に列島内の異種族間に血の混交が行はれ、異種族間に生活共同体が成立し得たか否かが問題となる。もしそのやうなことが無かったならば、変種の日本語は生じなかったであらう。

日本語が最初からの居住種族の言語であったとすれば、たとへ異種族の間に変種の日本語が生じたにせよ、それは方言的なものであって、種族の総合力において優れてゐた日本語を母語とする種族の言語である故に、少くとも列島内においては語法・音韻の面においては他言語の影響を受けない日本語が、主として言語の内的要因により変化して古代日本語となったと考へられる。したがって、日本語の祖語を明らかにすることが困難となるまでに変化した原因として考へられることは、日本語を母語とする種族が日本列島に渡来した時代が余程の太古時代であるため、言語の内的要因による変化が著しく、祖語の痕跡を殆ど消失した結果であるか、それとも祖語とは著しく異なってゐた語として渡来したかの二つの仮説が可能である。いづれにしても、祖語から分派したのは、太古の時代であったと推定される。

これに対し、日本語は最初からの居住種族の言語ではなく、日本語が渡来した時には、すでに先住種族の言語があったとする説に従へば、古代日本語の成立過程は、非常に複雑性を帯びてくる。この場合も渡来した種族の言語については異説があるが、ウラル・アルタイ語族系に属する言語とする説と南方語系の言語とする説とによって代表される。いづれにしても、先住種族をしてその母語を捨てさせたのであるから、日本語を母語とする種族は、先住種族よりも総合力において優れてゐたことは確かである。最近においては、南方語系の先住種族の基層の言語の上に、ウラル・アルタイ語族系言語の日本語が拡まったとする説が、いよいよ有力であり、(2)且つ注目されてゐる。一応この説にしたがって、先住種族の言語基層の上に大陸より渡来した日本語が列島内において拡まって行く過程について考察することとする。

註 (1) 「民族学研究」第十四巻第四号、今村豊・池田次郎両博士「清野博士の日本人種論に対する疑義」。

(2) 「国語学」第五輯、泉井久之助博士「日本語の系譜について」及び同輯「日本語の系統について」(座談会)における同博士の談話。

二

日本列島に大陸より渡来した日本語は、文化史的・経済史的・社会史的・政治史的諸条件と言語史的条件との下に、変遷し伝播して、八世紀の古代日本語が成立するに至ったのである。この成立の過程に対する一箇の仮説を提出することは、国語史及び方言における若干の問題に関する従来の見解に対し、新な見解が生ずることが期待される。もとより一個の仮説であり、且つ不完全なものであらうことを自ら認めながら、列島内における日本語成立の過程を考察する理由は、ここにある。筆者が問題とするところは、一個の言語が日本列島に渡来して先住種族の基層の言語の上に拡まる場合、前記の諸条件の拘束を受けつつ変遷し伝播する過程が、いかに方向づけられるかといふことである。したがって、日本語の祖語の問題は、この論述においてはさほど重要ではなく、またそれは筆者の能力の限界外にある問題である。

厳密な意味では、人種と言語との間には何ら必然的関係は成立しない。しかし、多くの場合、人種が異なれば言語も異なる。日本列島には、先史時代人種的に異なった種族が居住してゐたと見られる可能性があり、したがってそれらの種族の言語も異なってゐたと考へられる。

しかして、先住種族が日本語を母語とする後来の種族に追ひ払はれ、又は絶滅されるといふ事は少かったらしく、多くの場合支配種族と帰順種族とは雑居し雑婚して、徐々に混血が行はれたものと思はれる。[1] したがって、言語の接触があった。しかるに、日本語と接触した先住種族の言語が伝はらなくて、後に渡来した日本語が列島内に拡まって行ったといふ事実は、種族の総合力を構成してゐる文化・経済・政治・武器・人口等の要素の個々についてはともあれ、総合力において先住種族より優れてゐた事を意味する。しかして、総合力の各要素間の比重関係も、日本語を母語とする種族が渡来し

た当時の文化状態及びその土台である社会状態によって決定される。のみならず、列島内における日本語の伝波状態及び変遷の様相も決定される。したがって、日本語を母語とする種族が繩文文化時代に渡来したか、彌生式文化時代に渡来したかは、古代日本語成立の過程を決定する根本的問題である。

西暦三世紀前半頃日本を旅行した中国人の旅行見聞記を主要資料として編まれた魏志倭人伝の中に日本語の名詞が表記されてゐる。それらの日本語の名詞には、中国人によって表記されたものとはいへ、古代日本語の音韻的特質である甲乙両類の音の区別が大体書き分けられてゐる。したがって、三世紀頃までには、七八世紀の古代日本語と大差の無い日本語がすでに成立してゐたといふ事ができる。これによると、文献の上では日本語を母語とする種族の渡来年代の下限は、西暦二世紀を下る事はあり得ないが、その上限はどこまで溯り得るかが問題となってくる。

泉井久之助博士は、次のやうな意味の事を述べてをられる。(A)日本語は渡来以前に大陸においてすでに日本語的性格を有してゐた (B)日本列島に渡来した当時、列島には南方的な民族と言語とが主として西部特にその沿岸地方に行はれてゐた (C)渡来した日本語は基層の南方語の影響を受けて拡まった (D)そのため渡来当時強くなりつつあった日本語の母音調和の傾向が衰退した。(2)

泉井博士の高説に従へば、(1)南方的種族は自らの母語を捨てて、大陸から渡来した種族の母語である日本語を習得した(2)習得されて拡まった日本語は、基層の南方語の影響を受けて母音調和の傾向が衰退した日本語であり、渡来当時の日本語は列島内には拡まらなかったのである。(2)は、先住種族の南方的種族の人口が渡来した日本語種族の人口よりも圧倒的に多数である場合に限り、可能である。したがって、人口が圧倒に多い先住種族が自らの母語を捨てて、新来の種族の言語を習得するには、新来の種族の総合力が圧倒に優れてゐなくてはならない。即ち、人口において新来の日本語種族は圧倒的に劣ってゐたのであるから、文化・経済・政治・武器において、先住の南方的種族より圧倒的に優れてゐたといふ事

ができよう。泉井博士の高説は、後来の日本語種族が、このやうな条件を備へた場合に限り成立するであらう。

仮に繩文文化時代に日本語種族が列島に渡来したとして、このやうな条件が充たされるかどうかを考へてみよう。繩文文化時代は、原始農業萠芽の痕跡がある終末期を除いては、漁撈・狩猟を主とした採集経済時代であり、日本列島内の各地域における氏族社会の文化は同一性的であり、その発展は極めて緩慢であり、氏族社会相互間の接触も緊密ではなかったといはれてゐる。且つ、生産は血縁乃至地縁による共同体成員の生命を保持するに止どまり、富を蓄積する余裕が無く、共同体成員の間には一定の平等が保たれてをり、私有財産といふべきものや階級の発生を見なかったことが、考古学上の遺物や遺跡によって認められてゐる。氏族社会間の闘争及び連合・征服は、生産、したがって生産する労働力に余剰を生ずる事により、積極的、本格的なものとなる。したがって、上に見て来たやうな繩文式文化時代においては、日本列島内の各地域に占拠する氏族社会間の連合・征服は未だ生ずること無く、各地域に小生活文化圏が存在してゐるに止どまり、氏族社会間の接触も消極的なものであった。このやうな社会状態においては、自己の母語を捨てて他の種族の言語を習得する事は、恐らくあり得ないであらうし、あっても例外的であって、一言語が他言語の基層の上に日本列島の広範囲に亘って拡まるといふ事は考へられない。また、繩文文化においてもいくつかの発展階層があるといはれてゐるが、それも十幾世紀又はそれ以上に亘る長年月の間における極めて遅々とした発展であって、従来の文化階層を圧倒するやうな飛躍的発展の階層は起らなかったといはれてゐる。したがって、これまで見て来たやうな繩文式文化時代においては、他の言語の基層の上に列島内の広範囲に亘って言語が伝波するといふ事は、考へられない。ただ考へられる事は、列島内における先住種族の総人口よりも圧倒的に多数の人口の種族が、列島内の広範囲の地域に渡来した場合である。しかし、このやうな場合には、日本語の主流が少数の先住種族の言語の影響を受ける事はあり得ない。

したがって、既に述べた如く、日本語が先住種族の基層の南方語の影響を受けて拡まったとすれば、先住種族の人口が

絶対的に多数であり、絶対的に多数である先住種族の言語を捨てさせ、日本語を習得させる事ができる諸条件が日本列島の状態と日本語を母語とする種族との間に成立しなくてはならない。しかして、このやうな諸条件の成立は、先に見て来たやうな繩文文化時代においては不可能と思はれる。

註 (1)「文学研究」第三十七輯、拙稿「奈良朝時代東国方言の成立について」(上)。高群逸枝氏「大日本女性史」。太田亮氏「日本上代に於ける社会組織の研究」。岩波講座「日本歴史」所収丸山二郎氏「蝦夷隼人の順撫」。喜田貞吉博士「東人考」及び「夷俘・俘囚の考」。朝日新聞編「中尊寺と藤原四代」所収の毛利登氏「副葬品について」、津田左右吉博士「平泉の文化と中尊寺」、田沢金吾氏「奥州藤原氏と蝦夷の文化」、鈴木尚氏「遺体の人類学的観察」の諸論文。

(2) 前出の註の泉井博士の諸論文及び座談会の談話。

三

前に述べた泉井博士の高説が成立するためには、筆者なりの臆測を端的に述べれば、日本語は弥生文化と共に大陸より朝鮮半島を経て西部日本に渡来したか、又は弥生文化を輸入した種族の言語が日本語であったかのいづれかである。が、後説は極めて例外的の場合であらう。繩文文化と比して飛躍的に増大した生産力を有する弥生農耕文化の西部日本への輸入を俟って、はじめて基層の南方語の上に拡まる事が可能である。泉井博士は、慎重を期されて日本語渡来の年代については述べてをられないが、博士の「劉向『説苑』巻第一の越歌について」(1)及び「日本語の系譜について」などから推すと、日本語渡来の年代を筆者と略同じ年代に比定されてゐるのではないかと臆測される。

弥生文化の特徴は水稲耕作を中心とする農耕文化と金属器文化との輸入である。繩文文化末期に萠芽を見た農業生産は飛躍的に増大し、この文化の代表金属器である青銅器の他に、すでに石や木の農具に代って鉄器の農具の使用も始まったといはれてゐる。青銅器・鉄器の新鋭武器の偉力は驚異的であった。農耕文化と金属器文化の輸入とは、繩文文化時代に

おける氏族社会を質的に変貌させ、私有財産・階級の発生を土台とする古代日本国家成立の胎動の二大要因であると同時に、また古代日本語成立の胎動の二大要因である。即ち、すでに述べた如く、基層の南方語の上に渡来した日本語が拡まるためには、人口において先住種族より絶対的に少数であった日本語種族が、文化及び武力とその土台である生産力において、絶対的に優れてゐる事が不可欠の条件である。

古代日本国家胎動の原動力となった彌生文化の輸入年代は、専門学者間に異論があって、西暦紀元前一世紀と紀元前三世紀の間を上下してゐる。後漢の班固（——A.D 九二）が撰した「前漢書」地理志の燕地の条に、「樂浪海中有倭人、分爲百餘國、以歲時來獻」とあり、また記事の確実性は期し難いが、「後漢書」東夷伝の倭の条に、「舊百餘國、自武帝滅朝鮮、使譯通於漢者、三十餘國」とある。これらの外国文献中の記事も、西暦紀元前一世紀より紀元前三世紀の頃、繩文式文化時代において父僕的性格を有してゐた氏族の族長が、彌生文化における農業生産の飛躍的増大により、支配者としての豪族に変貌しつつあった強力な豪族が、北九州地域に相当数発生してゐた社会状勢を伝へたものと考へられる。

しかして、彌生文化の発生及び伝波について、杉原荘介氏は従来の説を幾分補足されて、次のやうに述べられてゐる。(2)

> 北九州に発生した彌生文化は、一次的には南方に延びていった形跡がある。この時期に、その文化が瀬戸内海を渡り、畿内地方に到達したかどうかは知られていない。二次的には、畿内地方にかなり強力な文化の存在を知ると同時に、その間の瀬戸内沿岸の諸所にこの文化は根を下し始めている。三次的には、畿内地方の文化は伊勢湾沿岸まで拡張されたが、それより以東へは延びなかった。

右の説は、西部日本に渡来した日本語の渡来地域及び伝波情況を比定する場合の資料となるが、それよりも重大な意味を有つものは、金関丈夫博士が彌生時代人骨の測定に基いて、結論中に述べられた事である。(3)

> 彌生文化とともに、頭長、頭幅、頭長幅示数の点では、日本石器時代人と大差のない、しかし、身長の点では、遥かに後者を凌駕する、新しい種族の相当な数が、新渡の種族として日本島に渡来し、北九州地方のみならず、畿内地方にまでひろがった。しかる

に、これにはその後ひきつづいて渡来する後続部隊がなかった。また、その数においては、在来の石器時代人に比して、遙かに少かったから、時代を重ねるとともに、その特異の形質、すなわち長身が、しだいに、在来種の形質の中に拡散し、吸収されて、ついにその特徴を失うに至った。

金関博士のお説は、杉原氏の考古学的考察とその結果において略一致する事において重要であるのみならず、日本語種族の渡来年代と基層の南方語の上に渡来した日本語が拡まり行く条件とを比定する上に、人類学的資料としてまことに重要な資料である。これにより、泉井博士のお説は、具体性と実証性とを与へられるであらう。

以上、これまで瞥見して来た諸種の事項を考慮すると、次のやうな事が比定される。

西暦紀元前二・三世紀の頃、彌生文化と共に、日本石器時代人に比して身長の点で著しく凌駕する新しい種族の相当な数が朝鮮半島から西部日本に渡来した。北九州の地域以外の西日本の他の地域例へば中国地方の日本海沿岸、瀬戸内沿岸などにも相継いで渡来したと考へる事も可能であるが、積極的根拠は無い。この新しく渡来した種族は、彌生文化を携へて渡来し、その母語はすでに日本語的性格を有してゐた言語であった。先住種族の繩文文化に比して、絶対的に卓越した生産力を有する農耕文化と金属文化とを有する彌生式文化の荷担者である新渡の種族は、その金属製武器の驚異的偉力により、人口数において絶対的に多数であった南方系の先住種族とその居住地域を支配する事を得た。と同時に、先住種族は自己の母語と自己の従来の文化とを捨てて、新渡の種族の言語である日本語と彌生式農耕文化とを習得した。しかし、人口数において、新渡の種族が先住種族より絶対的に劣勢であったといふ事は、人種の上では時代を重ねると共に、その特異の形質が先住種族の形質の中に拡散し、吸収されて、その特徴を失ひ、言語の上では、基層の南方語の影響を受けた変種の日本語が拡まるに至った。この変種の日本語は、殊に音韻の上に基層の南方語の影響を受けたと思はれるが、その最も著しいものは、渡来以前の日本語の特徴である母音調和が衰退した事である。

註 (1) 「言語研究」第二十二・二十三合併号所載。

（2）河出書房、日本考古学講座・『彌生文化』所収杉原荘介氏「彌生文化」一八頁。
（3）（2）の『彌生文化』所収金関丈夫博士「人種の問題」二四九頁。

四

西暦紀元前二・三世紀の頃、北九州地域にはじめて彌生文化と共に渡来した種族の言語が日本語であった。とすれば、日本語が大陸においてその祖語より分派した年代は不明にしても、西暦紀元二・三世紀頃はすでに魏志倭人伝に見られた如き日本語であったのであるから、泉井博士が推定された如く、日本語は、渡来以前すでに日本語的性格を形成してゐたと見るべきである。彌生文化と共に渡来した種族の言語である日本語が、新渡の種族よりも人口において絶対的に多数であった先住種族の言語の上に拡まったのは、彌生式文化の驚異的生産力と武器との偉力であった。この偉力は、列島内の従来の社会を質的に転換せしめる原動力であり、この偉力の所有者である日本語種族は、彌生式文化の伝波する生活文化圏の社会組織を変貌せしめて支配種族となり、古代日本国家形成の原動力となり、人口の劣勢にも関らず、質的には日本民族成立の主軸となった。

したがって、日本民族・古代日本国家及び古代日本語等の成立問題は、これらの成立の土台であるところの、彌生文化の輸入及び伝波が齎した日本列島における質的社会変革の歴史の諸事象の一環として把握する事によって、正しい解決への方向が確立されると思ふ。殊に、近隣諸語との言語的対応関係が未だ確立されず、文献の上でも言語的資料が甚だ乏しい事情の下では、古代日本語成立の問題を列島内における先史時代の社会史の一環として考察する事が、問題の本質的解決への正しい方法と思はれる。かかる立場において、奈良時代における東国方言の成立過程を考察する筆者は、後藤興善氏とは、方法論上、根本的に対立するものである事だけを一言つけ加へておく。(1)

彌生文化の日本列島各地域への伝播の年代は、その輸入年代において、専門家の説の間に略二百年前後の相異があるので、やはり専門家の間に年代の相異が生じてゐる。しかしながら、彌生文化の輸入地域やその伝波地域やその伝播地域の順序は、専門家間にも略一致してゐるやうである。

彌生文化の輸入・発生地域としては、筑前を中心とする北九州地方と大和を中心とする畿内地方とが挙げられてゐるが、最近では北九州地方を以って彌生式文化の輸入・発生地域とする事が確定的になったやうである。それは西暦紀元前二・三世紀の頃であらう。(1)先づ彌生式文化圏が北九州に発生した。(2)間もなく、九州は熊本・宮崎両県の南方地域まで、中国・四国はその西部地域に伝播した。(3)中国・四国東北及び近畿の西部に伝波した。(4)近畿全般に伝波した。(5)伊勢湾沿岸地域に伝波した。(6)中部地方に伝波した。(7)関東地方に伝波した。(8)東北地方に伝波した。以上の伝波地域と順序は、森本六彌氏の説に拠った。[2] 他の専門家との間に小異が見られるやうであるが、[3] 本稿の論述過程に大した相異は生じないと思はれるので、一応森本氏の説により述べる事にする。

(1)より(8)までの文化圏には、それぞれ先住種族の言語が行はれてゐたであらう。泉井博士によれば、西部日本においては南方的民族と言語とが拡まってゐたのである。したがって、(1)から(3)乃至(4)までの文化圏の先住種族の言語が南方語と仮定すれば、基層の南方語の影響を受けた変種の日本語が、これらの文化圏に拡まったであらうが、それぞれの文化圏の成立に年代的ずれがあるので、同じく南方語の影響を受けた変種の日本語の間にも、文化圏の相異に基いて、方言的差異が生じたと考へる事も可能である。また、日本語種族が日本列島にはじめて渡来した地域は北九州地方であっても、相継いで中国地方の日本海沿岸や中国・四国等の瀬戸内沿岸の地域に渡来したと考へる事も可能である。南方語の影響を受けた変種の日本語には、はじめから文化圏的、地域的差異が生じたと見られない事は無い。(4)及び(5)までは彌生文化は急速に拡まったといはれてゐるが、それは先住種族の抵抗が少かったためではなからうか。(5)の伊勢湾沿岸まで拡まった彌

生文化は、何か強力な抵抗を受けてその前進を阻まれたといはれてゐる。[4] 即ち、「遠賀川式土器」を源流とする西日本彌生式土器は伊勢湾沿岸で止どまり、縄文式土器の伝統を強く受け継いだ東日本彌生式土器が、三河・信濃・北陸以東に拡まって、西日本彌生式土器と対立してゐる。しかして、三河・遠江地方は、伊勢湾沿岸地方と駿河湾沿岸地方との接触地帯である事が、彌生式土器の分布の上に現れてゐる。また、銅剣・銅鉾・銅戈等の分布は、信濃に一個の例外的出土がある以外は、畿内以西である。[5] 銅鐸の分布も、遠江・三河・尾張・美濃・越前以西の本州・四国の地域に分布してゐるといはれてゐる。これらの事から、彌生文化時代伊勢湾沿岸より畿内以西の文化は、それより以東の文化と東西に大きく対立してゐた事、及び三河・尾張・飛騨・美濃・越前等の地域は、東西二大文化圏の接触地帯であった事が比定される。そして、奈良時代、万葉集の東歌及び防人歌の地域が遠江・信濃以東の国に限られて、東歌・防人歌の言語が、中央語及び西部日本語と対立した方言的差異の著しい言語であった事、及び平安初期の「華厳文義要決」の紙背に記された「東大寺諷誦文」中に「此当国方言、毛人方言、飛騨方言、東国方言」とあって、美濃・尾張以西の言語に対し、それより以東の言語が方言的差異が著しかった事等と対比して、日本列島の文化は、おそくとも彌生式文化時代より、前記の接触地帯を界として、東西に大きく対立して二分してゐた事が比定される。更に、前記の接触地帯が、現在でも略本州東部方言と本州西部方言との境界地帯である事は、国語の方言区域の大きな骨格が、先史時代の文化圏を土台として成立してゐる事を思はしめるのである。したがって、日本語は、日本列島に渡来した当初より方言的様相を呈しつつ拡まったと推定される。

註 (1) 「万葉集大成」第十一巻「特殊研究篇」所収後藤興善氏「東歌研究」。
(2) 森本六彌氏「日本農耕文化の起源」。
(3) 「日本文化史大系」第一巻「原始文化」所収、小林行雄氏「彌生式文化」。前註所出の杉原荘介氏「彌生文化」。
(4) 註の(2)(3)にあげた著書及び論文。
(5) 前出の(3)註「日本文化史大系」の「原始文化」所収、小林行雄氏「彌生式文化」。河出書房「日本考古学講座」の「彌生文化」所収、岡崎敬「銅剣・銅矛・銅戈」。

五

伊勢湾沿岸地方までは急速に拡まった彌生文化の進路が、ここで強力な抵抗を受けてその進路を阻まれた主要因は何であらうか。彌生文化時代の土器及び金属器の上に前述の接触地帯が存在する原因は何であらうか。それは、西部日本の先住種族乃至文化とは異なるものが存在して、対立してゐたためと思はれる。前に引用した金関博士の彌生式文化の伝波に関する人種学的考察も、筆者の臆測の裏書きとなるであらう。

彌生文化の接触地帯が、後の奈良時代の東国方言の境界地帯と略一致してゐる事は、極めて意味深いものがある。人種学的に差異のある先住種族乃至文化（生活文化圏）の相異が、伊勢湾沿岸まで進出した彌生文化に強力に抵抗し、その進出に一頓挫を来たさせた主要因であると共に、奈良時代の東国方言成立の土台であり、主要因であると考へられる。その先住種族は、古代文献に見える蝦夷と見られる。蝦夷は人種学的に日本列島の先住種族であるアイヌの後裔であり、時代と共に混血があったにしても、現在のアイヌの祖先と考へられる。アイヌ種族が北方から渡来したものか、南方から渡来したものであるかは、専門家の間でも説の一致を見ないやうであるが、また日本石器時代の列島内の居住者が人種的に同一であるか否かについては、定説が無いが、日本石器時代人に、地域的に体質的差異がある事は、なほ認められるであらう。しかして、蝦夷が人種的に奈良時代の日本人と異なってゐた事、及び蝦夷種族と日本語を母語とする種族との間に混血が行はれた事については、かつて述べた事があるので、今は省略する。

したがって、言語的にも、説の当否はとも角、かりに縄文式文化時代、列島内に行はれてゐた言語が同じく南方語系に属する言語であったと仮定しても、地域的には南方語系中の異なった言語が行はれてゐたと考へる事も可能である。また、列島の東部と西部では系統を異にした言語が行はれてゐたと考へる事も可能である。

それはともあれ、彌生文化の輸入及び伝波無くしては、先住種族の基層の言語の上に日本語が拡まり行く事は考へられないのであるから、伊勢湾沿岸以東に日本語が拡まったのは、彌生文化の伊勢湾沿岸以東進出の時代と時を同じうしてゐると見なくてはならない。したがって、日本語――西部日本で基層の言語の影響を受けた変種の日本語――が、伊勢湾沿岸以東に拡まった時、更に先住種族の言語の影響を受けたものと考へられる。かくて、西部日本の日本語とは、差異がある、殊に音韻の上で著しい差異がある二次的変種の日本語が成立したと考へられる。勿論、西部日本の一時的変種の日本語の間にも伝波の時代や地域の相異にしたがって、小差異が生じてゐたと考へられる。しかし、その差異は、西部日本の一次的変種の日本語と東部日本の二次的変種の日本語との差異に比すれば、遙かに小であったと思はれる。奈良時代の東国方言は、この二次的変種の日本語の土台の上に、時代の変遷を経て成立したと考へられる。しかして、奈良時代の東国方言にも更に小方言区域が見られるのは、日本語の伝波年代と地域の相異に基いて生じたものと見られるのである。

かくて、先住種族の基層の言語の影響を受けつつ、日本列島に拡まった日本語は、その伝波過程の各地域において方言的様相を呈したのであるが、列島の西部と東部とでは、更に著しい方言的差異を呈して、方言的に二大区域を形成するに至った。各地域において方言的様相を呈しつつ拡まる事によって、日本列島内には日本語といふ共通語が成立したのである。ここで注意すべき事は、共通語成立以前の日本語成立過程における方言成立と共通語成立以後の方言成立とは、非常に密接な関係がある事は疑ないにしても、一応区別しなくてはならない事である。大和地方を中心とする言語が、中央語として各地の方言に影響するやうになったのは、日本語が列島内で共通語になり得た以後の事に属する。古代日本国家成立後、首都の言語が各地の方言に影響を及ぼす以前、列島内の各地域において方言的様相を呈してゐたのである。琉球諸島中、沖縄本島及びその周辺の諸島までは、縄文式文化の痕跡がある事が、最近明らかになったといふ。しかして、服部四郎博士は琉球語が日本語より分派した時代を現今より略二千年以内に比定されてゐる。[1] とすれば、彌生式文化と共に、

琉球語は、最初は先住種族の南方語の影響を受けた変種の日本語として成立したものであらう。

註（1）「言語研究」第二十六・二十七両号合併号所載、服部四郎博士「言語年代学、即ち語彙統計学の方法について――日本祖語の年代――」七〇頁及びその脚註。

結

これまで述べた事を要約し、更にこれらの事より考へられる事を結論的に述べれば、凡そ次のやうにならう。

一、日本語は、先住種族とその言語とが存在してゐる西部日本に新しく渡来した種族の言語であり、この新渡の種族は彌生文化と共に渡来した。少くとも彌生文化が列島内においてはじめて発生したのは、この新渡の種族の居住地域であった。

一、渡来した日本語は、先住種族の基層の言語の影響を受けて、伝波する各地域において、変種の、方言的様相を呈しつつ伝波した。したがって、日本語は伝波の当初より方言的であった。したがって、列島内において、日本語が同一であった時代は無い。

一、先住種族の言語の上に、人口において先住種族より絶対的に劣勢であるに関らず、伝波する事ができたのは、彌生文化が齎した農業生産の飛躍的増大と金属武器の驚異的偉力により起った日本列島内部の社会の質的変革である。

一、この社会の質的変革を土台として、日本民族及び古代日本国家は成立したのであるから、古代日本語の成立過程も、これらの成立史の一環として把握し、考察すべきである。

一、古代において、共通語としての日本語が成立したのは、古代日本国家成立と時代を同じうする。したがって、古代共通語成立以前の列島各地域における、変種の、方言的日本語の成立と、成立以後の列島内における方言の成立と

は、成立過程において根本的に異なるから、区別すべきである。

一、したがって、方言周圏論は、古代日本国家成立後、首都の言語と中央語としての権威を有するやうになった後、はじめて方言語彙学的に適用されるべきものであって、その適用には慎重を要する。殊に古代日本国家以前に日本語より分派した琉球語においては、地理的位置より見て、琉球語と内地の諸方言との交渉が具体的に明らかにされない限り、慎重を要する。

（本稿は、昭和三十年五月十四日開催の国語学会公開講演の際の原稿を、論文的に改稿したものである）

——九州大学教授——